

小豆の新品種「岩手大納言」の解説

誌名	農業技術
ISSN	03888479
巻/号	264
掲載ページ	p. 177-178
発行年月	1971年4月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波事務所
Tsukuba Office, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat



小豆の新品種「岩手大納言」の解説

古沢典夫他

はじめに

小豆はやや価格の変動が大きい、大豆よりは概して収益性が高く、労働報酬も高い省力作物であるため、畑作のみならず水田転換作物として現在大いに注目されている。とくに大粒美しい小豆は大納言規格とされ、40%以上の高値での取り引きが通例である。

東北地方の小豆面積は北海道につぐ17,660haで、全国の18%を占めるが、反収は90kgで全国平均の79%、北海道の64%と少ない。また岩手県は、熊本、福島について第3位の4,130haであるが、反収は78kgで全国の69%、東北平均に比べても87%と、全国で下から4位の低収に甘んじてきていた。

東北地方は、冷害の恐れがほとんどないなど安定性で北海道にまさるはずで、面積も多い本来の小豆の適地と考えられるにもかかわらず、このような不振は全く意外といわざるをえない。

その理由としては、あるいは県などが力を入れてこなかったからの一言に尽きるかもしれない。また、近年地域内で品種育成が行なわれておらず、優良品種の種子更新が十分でないこと、ウイルス病、土壌線虫など病虫害が多発していることによる影響は、とくに大きなものであろう。また、品種が雑多で、流通とからんで商品価値を著しく落としていることも否めない。

本品種は、岩手県におけるこのような現状を改善するためにとくに意義があるもので、必然的に単に奨励品種編入のみでこと足れりとは考えていない。すなわち、この品種の導入を契機として、優良無病(ウイルス)種子の増殖配布、土壌施肥の侵透性殺虫剤利用などによる防除の徹底、施肥改善、流通の合理化など、総合的な推進が切望される。また、現実に主産地形成を目標とした大規模な現地施設が計画されていることを附記したい。

なお、本品種の育成と普及推進にあたり、日本豆類基金協会からご指導ご援助をたまわっていることが多く、深甚な謝意を表す。

来歴：昭和40年、岩手県内の在来種21集団を蒐集したさいに、久慈普及所から送付を受けたものを母集団とし、早中晩の成熟期によって分類するなど系統選抜を加え、固定を図ったものである。

特性：本品種は粒が大きく豊満で皮色は鮮紅で冴え、いわゆる大納言銘柄にかなう良質種であること、蔓化、徒長しにくく、安定多収であること、成熟期は中生に属し、高冷地を除く県中部以北一円に広く適応性を持つこと、以上3点が特色である。

すなわち、粒は楕円形、百粒重は17g以上で大館2号に比べ55%も重く、粒色も大館2号よりまさらしている。収量は、大館2号に対し岩手農試5カ年の成績で10%増の22kg/a程度、県北分場では13%増の29.5kgの多収である。現地試験では県北で8%、県南の晩播で19%増を示した。

成熟期は9月22日ごろで、大館2号よりは4日ほど遅く、県北では中生の晩に属している。

第1表 生育・収量調査成績

試験場所 (年次)	品種名	莖長 cm	着莢数 cm	成熟期 月・日	収量 kg/a		粒色	品質
					子実重	精粒重		
本場 昭41~45	岩手大納言	63.7	20.1	9・20	23.5	22.0	鮮紅	上中~上下
	大館2号	59.2	27.7	9・16	20.8	20.0	紅	上下~中
	光小豆	52.6	32.7	9・16	21.6	19.9	紅	中~中下
	紋別26号	89.7	21.4	未成熟	20.9	19.8	鮮紅	上中~上下
県北分場 昭45	岩手大納言	96.1	31.3	9・22	30.4	29.5		
	大館2号	85.1	32.8	9・14	28.7	26.0		
	円葉1号	36.6	33.5	9・15	26.2	25.6		
	宝小豆	64.3	38.9	9・20	26.7	25.5		



第1図 左：岩手大納言、右：大館2号

葉は円葉型、大館2号よりは多少長めの中茎種で、大館2号につぐ程度に蔓化しにくい。茎はやや細めで登熟後期にややなびくことがある。分枝数は大館2号と同程度かやや多めで、節数は少なめ、着莢数は主茎上位にやや疎で少ないが、粒大で収量を確保する。

熟灰色は明るい淡褐色で、熟色は美しい。

晩播適応性は大、滝沢では6月上旬播きでも減収が少なく、開花まで期間が促進されても晩播によって登熟期間が変わらず、粒大に差が少ない。

第2表 製籾特性調査成績

時間	岩手大納言	大館2号(標)
0分	湯を入れ火にかける	湯を入れ火にかける
2	沸騰しはじめる	沸騰しはじめる
8	湯の色はやや濃い赤褐色	うすい赤褐色、表皮は紫変
11	表皮が紫変、粒が横に浮く	粒たてに浮く
13	急速に湯が減少	
17		急速に湯が減少
25	湯の色は濃い赤色	湯の色は濃い赤色
34	湯の色不透明	
37		湯の色不透明、表皮裂開
38	表皮裂開	
54	粒が砕けはじめる	
61	半分ぐらい砕ける	
62		粒が砕けはじめる
65	皮がやわらか	皮がかたい
70	硬実ない	3分の1ぐらい砕ける
72		半分砕ける
83	ほとんど砕ける	硬実ない
97	粒形なし、湯もなし	粒形残る、湯38cc残る

注) 小豆は各々18.7g、45年度産のもの。フラスコによる煮沸、水494cc使用。

第3表 篩による粒選調査成績

品 種 名	5.5mm目篩通過率	同左100粒重	5.5mm目篩残留率	同左100粒重	無処理100粒重
岩手大納言	11.93%	12.6g	88.07%	17.2g	16.2g
大館2号(標)	95.92	10.6	4.08	15.3	10.6

硬実は認められず、皮はうすく、製籾特性においても大館2号よりかなりまさっている。

栽培上の注意 やや蔓化しにくいから、 m^2 当り17株(2本立の場合は半分)程度とやや密植する。滝沢では6月上旬までとし、極端な晩播は避ける。

窒素量は成分で0.4kg/a程度が無難で、磷酸、加里は多め(成分1.0, 0.8kg)とする。磷欠地帯では磷酸多投(燐4:過石1の比率)が望ましい。

ダイズシストセンチュウに対しては他の品種同様に強くない。ウイルス病に対してもとくに強くないから、土壌施葉の殺虫剤(ダイズトンなど)を必ず使用する。3年に1回の種子更新も必要である。

本品種はとくに販売用としてすぐれており、大納言規格とするため5.5mm目ぐらいの篩を通し、粒色を揃えるなどの調整を吟味することが大切である。

水田転換作としては、初年度で23.2kg/aの多収を得ていて、好適するものと判断される。

適地 標高400m以上の高冷地を除く県中部以北の全域で、水田転換畑も含める。県南における成績も良好であるが、他の育成系統との関連でなお検討する。

命名の由来 岩手農試の育成であり、かつ、広く岩手県に適応すること、大粒美麗で大納言銘柄にかなう良質種であることを意味する。

(岩手県農業試験場技術部・技師)

富山市における低質米の原因と対策

平井弘義 高橋猛 今川 進 池田利昭

は し が き

富山市における米の主産高は、およそ47,000t、このうち政府への売渡量は37,000t余りで、本県売渡量的なおおむね13%を占める。

近年、米の余剰化にともない、玄米の品質を高めることは、主産地として、きわめて重要な問題となってきた。しかるに富山市における3等米以上の、いわゆる上位等級率についてみると、昭和44年度は60.9%、45年は57.9%と、県平均よりつねに低く、ことに45年度は局地的な台風禍などもあって県下の最下位を占めるに至った。

このような低位等級の原因を検査等級格付理由についてみると、未熟粒(腹白、基白、乳白、死米など)によるものが、44年度は全体のおおむね53%、45年度は48%と、例年もっとも多く、ついで胴割粒によるものが36%、肌ずれなど9%、その他5%となっている。

したがって、富山市において良質米を主産するためには、このような未熟粒の発生を少なくし、胴割粒の発生を防止することが必要であると考えられる。

ところで、胴割粒や未熟粒などの発生機構については、かなり多くの研究がある(1,2,3,4,5)。しかし、胴割粒の研究をのぞいては、栽培条件と玄米の形質などに関する